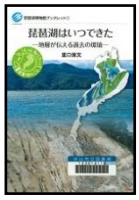
今月の PICK UP

『琵琶湖はいつできた』 里口 保文/著 サンライズ出版 S452.9 サ



7月1日は県の定めた「びわ湖の日」です。そこで、琵琶湖の生い立ちについて書かれたこちらの本はいかがでしょうか。

琵琶湖は、約400万年前に三重県伊賀に現在の南湖よりやや小さいものができたと考えられています。約100万年前までに現在の位置まで移動し、その後、北に向けて今の形にまで広がったようです。

この本では、研究者たちが行ってきた地層調査や琵琶湖底のボーリング調査等が豊富な写真と図によってわかりやすく解説されています。湖が移動した理由も研究者によって様々であったことが、丁寧に記されています。

この本は「琵琶湖博物館ブックレット」シリーズの一冊で、他にも琵琶湖の生物や鉱物をテーマとした本があります。

司書のおすすめ

『翻訳家じゃなくてカレー屋になるはずだった』 金原 瑞人/著 牧野出版 801.7 カ

著者は、タイトルにあるように、大学卒業後は屋台のカレー屋をやるはずでした。翻訳家になったいきさつや、翻訳の仕事の話、今まで出会った魅力的な本や人との思い出話などが、ユーモアをまじえながらも真摯に書かれています。エッセイとして、またお仕事本やブックガイドとしても楽しめる一冊です。

『教養としての「国名の正体」』 藤井 青銅/著 柏書房 202.3 フ

日本は「ニホン」なのか「ニッポン」なのか、オーストラリアとオーストリアの国名が似ている理由は何かなど、国の名前について何となく疑問に思っていることは多いと思います。

この本では、国名の由来の他、共和国や王国の違い、国名が似ている国は単なる他人の空似なのかといったことを教えてくれます。各章の最後には「さて、日本は?」と、各国と比較して日本はどうなのかということも載っています。

『天空の地図』 アン・ルーニー/著 鈴木 和博/訳 日経ナショナルジオグラフィック社 440ル

古代ギリシア時代から、遥か頭上に広がる未知の世界を人々は想像し、地球を中心にして宇宙が回っていると信じられてきました。しかし、望遠鏡の発達と共に、目で見えない世界を見る事が出来る様になりました。これまでの宇宙観の変化を200点の美しい絵画や画像で辿る、気軽に天文学の歴史が楽しめるビジュアル書籍です。

『鎌田式「にもかかわらず」という生き方』 鎌田 實/著 宝島社 159.7 カ

思い通りの人生を送れる人は、この世にどれくらいいるのでしょうか。

現状を受け入れられなかったり、後悔する気持ちが強かったりすると、手に入らなかったものに執着しがちです。また、老いや病、死については誰もが避けては通れません。

けれど、医者である著者は「にもかかわらず」という考え方で発想の転換をはかれば、もっと楽に前向きに生きていけると教えてくれます。読後は、物事を別の角度から見て得た新しい気づきに心が軽くなります。